



EDEN 国語講座/第六回

【今回のねらい】

国語講座第六回では、説明文の指示語について学びます。
文章中にある指示語が指す内容をしっかり読み取り、理解できるようにしましょう。

【1】次の文章中から指示語をみつけて、○をつけてみましょう。

- ① 屋根の赤い家が見えますか？あれがぼくの家です。
- ② こんなひどいことを許してたまるものか！
- ③ どうしてもこの問題が解けないんだ。
- ④ ああ、もう疲れたなあ。
- ⑤ ぼくのシャープペンシルどこに行ったかしらない？

【2】次の文章中の指示語が指す内容を答えなさい。

- ① 私は三十六色の色えんぴつを持っています。これは私の大切な宝物です。
- ② 奥の部屋のいちばん太い柱の上に、かけ時計がかかっているのが見えるですよ。でも古いので、あれはもう壊れて動かないのです。
- ③ ぼくは毎日、自転車に乗っています。それは去年の誕生日に、お父さんに買ってもらったものです。
- ④ ぼくは毎日、自転車に乗っています。それはぼくにとってとても楽しいことです。
- ⑤ 海の向こうにしずもうとしている夕日を指差して、お母さんは「あれをみてごらん。なんて美しいんでしょう」と言った。
- ⑥ 机の上に本があった。それは、母が読んでいたものだ。
- ⑦ 机の上に本があった。それは、意外なことに思えた。
- ⑧ 私はこう思います。感謝の気持ちが大切だと。

次の文章中に出てくる指示語の指す内容を答えなさい。

- ① 良平は小時(しばらく)無我夢中に線路の側を走り続けた。そのうちに懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側(みちばた)へ抛(ほ)り出す次手(ついで)に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。
(芥川龍之介／トロッコ)

- ② 心の友を作るためには、長期間に渡って相手とコミュニケーションを取り続けることが必要である。その際に相手に嫌われることや、悪く思われることを恐れずに思ったことを相手に伝えることが大事だ。学校の先生の述べるたまたま出会う仲良しクラブである「物理的な出会い」では、単なる遊び友達はできても本当の心の友はつくることができない。

なぜならたまたま同じ集団に属していたり、人から紹介されたりして知り合っただけでは相手の中身までは知ることが出来ないからだ。長期間に渡ってコミュニケーションを取り続けることで、相手のことを十分に理解した上で付き合うことが出来る。

しかし、それにより相手の悪い部分が見えてきたり意見がすれ違ったりすることがあるかもしれない。そこで相手の顔色を伺って嫌われることを恐れてはいけない。思っていることを素直に相手に話すべきだ。心の友とは、互いの考え方や価値観の違いも理解し合える関係だと思う。全く同じ価値観や考え方を持っている人間は存在しない。

- ③ 古くアイヌは、自分たちをとりまく森羅万象(しんらばんしょう)を、自分たちと同様の生き物と考えていた。例えば風であるが、それはわれわれにとってこそ単なる空気の動きにすぎないのであるが、彼らにとってはそれは一個のれっきとした生き物であった。

(中略)

風が終日吹き荒れていたのが、夕方になってハタと拭きとだえることがある。そういう夕なぎのことを「レラ オヌマン イベ」(風が夕方に食事する)という。風も人間同様に夕食をとり帰宅するという考え方である。

④ 「グローバル人材」を育てるためにどんな教育をすればよいかということになると、やはり「英語力強化」の域を出ない議論が目立ちます。小学校から英語の時間を入れる、ネイティブスピーカーの先生に授業をしてもらう、英語を積極的に受けさせる、英語教育に特化した推進校をつくる…。

これらの方針が英語力強化にどれくらい実効性があるかという問題もありますが、それはまた別の機械に検証するとして、ぼくがみなさんに留意していただきたいのは、英語は目的ではなく手段であるということです。つまり英語は、異なる母語を持つ人々が意思疎通するために標準的に通用するようになった道具に過ぎません。

英語を母語にする人々は全世界で四億人いると推定されています。以前、ぼくが米国の大学で教えていた際に、アメリカ人学生がことあるごとに口にしていた不安や焦燥感、日本人が自分の英語力に対して抱く不満と正反対だったと言えます。日本人は「A」と考えがちです。しかし英語を母語にするアメリカ人学生にとっては、世界中から英語の優秀な人材が競争相手として殺到してくるので、むしろそれ以外のスキルを身につけないと生きていけない、そう考えているのです。

つまり、競争のスタート地点に到達するためには、英語ができるのは当たり前。肝心なのはその中身、つまり英語を使って「何を問い、考え、表現するか」がなければ、意味がないのです。日本語を母語にするものにとっては、何が自らの価値の源か、よく考えてみる必要があるのです。

⑤ (前略) 手間は同じで、モウケからいえばセットの売りの方がぐんと大きい。とすれば、単品売りはバカらしい。家具屋さんがセット化するのは結局のところ、そういう発想にもとづいている。(後略)

⑥ 大阪大学などが先月発表した新しい生分解性プラスチックは、植物でできています。使ったのは、イモの仲間キャッサバに含まれるでんぷんと、紙の原料パルプに含まれるセルロースです。キャッサバは、流行りのドリンクに入っているタピオカの原料です。それらを水に溶いてうすくのばし、熱を加えてシート状にしました。